

薬史レター

日本薬史学会

J S H P



第76号

2016年9月

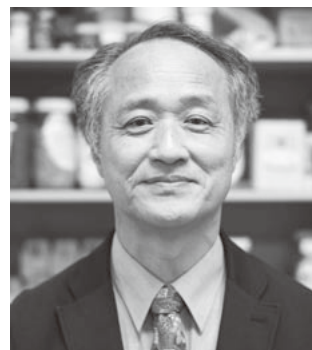
新会長就任のご挨拶

日本薬史学会会長 折原 裕

本年4月より津谷喜一郎前会長の後を受けて、日本薬史学会会長を務めることになりました。私は1954年に創立された本会と同年齢であり、本会の歴史の長ささと責任の重さを感じているところです。大学院までは有機化学の研究室に在籍しており、北里大学に移ってからは生薬学（植物組織培養による有用二次代謝産物の生産）の研究に携わってきました。第4代会長の柴田承二先生は東大薬用植物園の初代園長であったという縁もあり、薬用植物園に移ってからは甘草についてたびたびお問い合わせがありました。

2012年に津谷先生が会長になられたときから広報委員長としてホームページの充実に努めてまいりました。また、薬史学会の運営について津谷会長のそばでいろいろ教えていただきました。

すでに会員皆様ご存知のように薬史学会の財政事情は危機的な状況に陥っています。ここ何年にもわたる単年度赤字を繰り返した結果、運転資金として必要な繰越金の十分な額を確保できない状況になっています。私に課された第1のそして唯一と言っても良いミッションはこの赤字体質の改善であると



折原 裕会長

思っています。すでに今年度の予算立てにおいては赤字を出さないことを目標に全ての支出の見直しをはかり、予算上では収支均衡がとれています。

薬史学という研究分野は研究者人口が少ないと考えてきましたが、薬学の研究者がシニアとなり自らの研究を顧みるのに最適の研究分野ではないかと思うようになりました。自らの研究を振り返るとともに第2のフレッシュマンとして薬史学の研究分野に飛び込む研究者が増えることを願ってやみません。学会を存続、発展させていくために、会員諸氏のますますのご支援、ご協力をお願いして会長就任のご挨拶といたします。

折原裕会長のプロフィール

1954年栃木県生まれ。1978年東京大学薬学部卒業。1980年東京大学大学院薬学系研究科修士課程修了、同年北里大学薬学部助手（生薬学教室）。1993年博士（薬学、東京大学）。1996年7月東京大学薬学部助教授（附属薬用植物園）。2007年東京大学大学院薬学系研究科准教授。著書：薬用植物・生薬の開発（分担執筆、シーエムシー出版、2001）、薬用植物・生薬開発の新展開（分担執筆、シーエムシー出版、2005）、Olives and Olive Oil in Health and Disease Prevention（分担執筆、Oxford: Academic Press, 2010）。

日本薬史学会2016年会(東京)のご案内

年会長：岡田嘉仁(明治薬科大学天然薬物学研究室)

日本薬史学会2016年会(東京)を下記の要領で開催します。本年会では、一般講演(口頭・ポスター)の他、明治薬科大学名誉教授 岸本良彦先生による“ディオスコリデスの『薬物誌』”と題した特別講演を、また国立科学博物館・産業技術史資料情報センター長の鈴木一義先生による“江戸時代の科学技術に見る日本の文化と心”を特別講演・市民公開講座として予定しています。皆様のご参加をお待ち申し上げます。



岡田嘉仁年会長

【開催期日】：2016年10月29日(土)

【会 場】：明治薬科大学 清瀬キャンパス

日本薬史学会2016年会(東京) プログラム

受付開始 9:30～

開会の挨拶 10:00～10:05

日本薬史学会2016年会会長 岡田嘉仁

会長挨拶 10:05～10:10

日本薬史学会会長 折原 裕

4. 戦後日本の薬事改革についての再検証

赤木佳寿子(昭和薬科大学 地域連携薬局イノベーション講座)

特別講演 11:15～12:15

口頭発表 1～4 10:10～11:10(各15分)

座長：小清水敏昌・西川 隆

座長：岡田嘉仁(明治薬科大学)

ディオスコリデスの『薬物誌』
岸本良彦(明治薬科大学名誉教授)

1. 経口抗凝固薬の歴史－ワルファリンとNOACの比較

高橋春男(日本医薬情報センター)

昼休み休憩 12:15～13:30

理事会・評議員会 12:20～13:20

2. 中国製ダイエット製品を契機とした未承認医薬品等による健康被害とその後の対策

○ 齋藤充生^{1,2}、林 譲¹、矢島毅彦¹(¹ヘルスヴィジランス研究会、²日本医薬情報センター)

ポスター発表示説時間 13:30～14:20

特別講演・市民公開講座 14:30～15:40

3. 松江藩雲州人参(御種人参)栽培の東西隣域への波及－三瓶山、伯耆大山－

成田研一(鳥根県薬剤師会江津・邑智支部)

座長：古屋英治(呉竹学園東洋医学臨床研究所所長)

江戸時代の科学技術に見る日本の文化と心
鈴木一義(国立科学博物館 産業技術史資料情報センター長)

口頭発表 5～9 16:00～17:15 (各15分)

座長：船山信次・松崎桂一

5. 医薬のシンボル 蛇について

石田純郎 (岡山大学医学部非常勤講師)

6. フランシス ケルシー博士 (Frances O. Kelsey, MD, PhD) の生涯から教えられるもの：使命感と責任感の醸成

森本和滋 (日本薬史学会)

7. 近代医・薬学発祥史 10報 F.W.A. ゼルチュルナーと J.B. トロムスドルフ

辰野美紀 (順天堂大学医学部医史学研究室)

8. 古代インドの薬学 『パウアー写本』第2部におけるトリパラの処方について

夏目葉子 (日本薬史学会)

9. 医薬品の一般名に関する考察 (5)：抗悪性腫瘍薬

三澤美和 (星薬科大学名誉教授)

次年度年会会長挨拶 17:20～17:30

日本薬史学会2017年会会長：船山信次
(日本薬科大学教授)

閉会の挨拶 17:30～17:35

日本薬史学会2016年会実行委員長 馬場正樹

懇親会 17:45～19:30

<ポスター発表>

10. 明治36年の監獄薬剤師

五位野政彦 (東京海道病院)

11. 十二代田邊五兵衛の先駆的企業家活動

安土昌一郎 (法政大学大学院)

12. 『緒方洪庵の薬箱 (大阪大学所蔵)』研究：第一の薬箱の現況

○ 木村康人¹、高浦 (島田) 佳代子^{2,3}、小栗一輝²、楠木歩美²、井原香名子¹、上田大貴¹、高橋京子^{2,3} (¹大阪大学薬学部、²大阪大学大学院薬学研究科、³大阪大学総合学術博物館)

13. 『緒方洪庵の薬箱 (大阪大学所蔵)』研究：第二の薬箱の現況

○ 上田大貴¹、高浦 (島田) 佳代子^{2,3}、小栗一輝²、楠木歩美²、井原香名子³、佐藤智紀²、奥菌彰吾¹、中村朝実¹、末元吹季¹、木村康人¹、高橋京子^{2,3} (¹大阪大学薬学部、²大阪大学大学院薬学研究科、³大阪大学総合学術博物館)

14. 医療人養成に向けたある物理学研究室の挑戦 (第2報)

串田一樹 (昭和薬科大学 地域連携薬局イノベーション講座)

15. 老舗薬局に保管されていた医薬品からの歴史的考察

松崎桂一 (日本大学薬学部生薬学研究室)

16. 韓国近代薬学教育百年史記録作業「発表取り消し」

○ Chang-Koo Shim, Jeong Hill Park, Jinwoong Kim and Eun Bang Lee
(College of Pharmacy, Seoul National University)

その他、大会の概要については日本薬史学会のホームページをご参照下さい。

<http://yakushi.umin.jp/>

第9回柴田フォーラムが開催（報告）

柴田フォーラム委員長 船山信次

日本薬史学会の第9回柴田フォーラムが2016年8月6日（土）午後2時から京都大学大学院薬学研究科マルチメディア講義室（薬学部教育棟1階）で、約50名が参加して開かれた。世話人は同研究科薬品資源学分野の伊藤美千穂氏（本学会評議員）が務められ、①永益英敏氏（京都大学総合博物館教授）の「江戸の本草学と植物学」、②井上健夫氏（三栄源エフ・エフ・アイ株式会社取締役執行役員）の「食品着色料とその規制法令の歴史の変遷」の2講演が行われた。両講演とも薬史学研究の立場からみて興味深い内容で、質疑も活発であった。その後、恒例の懇親会が和やかに行われ、午後6時半過ぎに終えた。

講演1 江戸の本草学と植物学

永益英敏先生（京都大学総合博物館教授）

植物分類学を専門とされ、国際植物学会の命名委員などとしても活躍されている永益英敏氏のお話しは、江戸時代に来日した3人の植物学者であるケンペル（わが国への滞在は1690～1692年）、チュンベリー（同1775～1776年）、そしてシーボルト（同1823～1829年、および1859～1862年）の紹介から始まった。

チュンベリーはリンネ以降の学者であり、著書の『日本植物誌（*FLORA JAPONICA*）』は日本の植物の学名を二語名法にて扱った重要な著作である。また、ウプサラ大学には彼が持ち込んだイチョウの腊葉標本があり、今はインターネットでも見ることができると、そして、シーボルトがたくさんの資料をオランダに持ち込んだ話、さらには、シーボルトの薫陶を受けた日本人の中にはわが国最初の理学博士となった伊藤圭介がいたことなどが説明された。

一方、江戸時代初期の1607年には『本草綱目』が林羅山によってもたらされ、わが国に多大な影響を与えた。この本の影響によって執筆された書物の中には1709年の『大和本草』やその後の小野蘭山による『本草綱目啓蒙』（1803年）などがあるが、後者は日本

の自然物についての知見の集大成的な著作である。『本草綱目』は江戸時代の本草書の代表として認められるが、啓発されてわが国で刊行された本の内容は次第に日本的、博物学的なものに変容していった。わが国における本物の植物学の出現は、宇田川榕庵により1822年に出された『蕃多尼訶経』が現れたあたりからであるが、江戸時代後期から明治にかけての本草学から植物分類学への移行は比較的スムーズなものであったという。

江戸期の本草学および植物学の台頭とその発展過程に興味深く拝聴することが出来た。

講演2 食品着色料とその規制法令の歴史の変遷

井上健夫先生（三栄源エフ・エフ・アイ株式会社取締役執行役員）

食品・食品添加物の研究誌『FFI ジャーナル』も発行している三栄源エフ・エフ・アイ株式会社の取締役執行役員である井上健夫氏のお話しは、食品添加物のうちの食品着色料についてであった。

ヒトが食べ物のおいしさを感じる際に支配する感覚のうち視覚が占めるのはなんと87%であるという。このことから、なぜ食品に着色するのかということが理解される。また、色と食品とのかかわり、そして、法規制などについて、歴史をたどりながら説明された。



会場風景

食品に使用された色の話は古代に始まり、かつてはベニバナやクチナシの使用が多かったが、江戸時代に入ると、食品加工はひとつの全盛期を迎え、食品への着色も増加し、食欲をそそり、食品の美味しさや楽しさを満たすという現在の食品着色の目的はこの頃に始まりを見ることができるという。さらに、明治期に入り、海外で生まれた化学染料が輸入され始めると、化学染料による食品着色が行われるようになってきた。しかし、当初は品質に関する規制が無く、中毒が多発するようになり、これを受けて法

的規制が整備されはじめた。近年では、食品の着色には再び天然着色料が多用されるようになり、カロチノイド系色素、アントラキノン系色素、アントシアニン系色素などが天然着色料として数多く使われており、古くからの長い使用経験が脈々と受け継がれているといえる。

このお話しを通して、古くからの「食」と「色」のかかわりや法規制、使用実態などを知り、歴史的にもヒトの「食」にいか「色」が密接に関わっているかがよく理解できた。

日本薬史学会第4代会長・柴田承二先生を偲ぶ

日本薬史学会名誉会員 山田光男

このたび、日本薬史学会（以下当学会）第4代会長・柴田承二先生（以下柴田先生）が7月12日に逝去されたとのお知らせを受け、謹んでお悔やみを申し上げ、柴田先生が会長として担当された1991（平成3）年から2003（平成15）年までの12年間で、学会の近代化をはかり現在の体制を確立された先生の業績を、会員と共に偲びたい。（以下敬称略）

当学会は、朝比奈泰彦を会長として1954（昭和29）年10月25日に設立された。当初は、清水藤太郎常任幹事が「月刊・薬局」（南江堂）に当学会記事を掲載し、木村雄四郎常任幹事が学会運営を担当して発足した。朝比奈会長の後任として、清水常任幹事が会長就任予定のところ、急逝で不可能となり、木村常任幹事が第2代会長に就任した。

木村会長のあと、吉井千代田会長代行を経て、1986（昭和61）年4月、東京大学生薬教室出身の野上壽名誉教授が木村会長の後任として第3代会長に就任された。野上会長は評議員制度の新設などを目指した。また、大阪に当会西部支部を設けることになったが、その準備中に野上先生が急逝された。

1991年（平成3）年4月に第4代会長に就任された柴田先生は、野上前会長の方針を引き継ぎ、当学会近代化を目指して事務局体制の整備を強力に推進することになった。

当会の発足以来、業務処理は前述のとおり日本大



柴田承二先生

学薬学科、あるいは東京薬科大学など、運営委員会は学士会館、薬学会館、その他などで行われたが、柴田会長期に（財）学会誌刊行センターと正式に契約ができて、会員管理、学会誌編集の事務移管および運営のための常任理事会、会誌の発送業務なども同センターを利用できるようになった。

また当学会の運営組織は現在のように整備され、総務、財務、編集、企画、広報など各委員会、常任理事会など、および西部（現関西）、北海道、関西、中部の各支部などが設立された。

柴田先生は「日本薬学会百年史」刊行後の継続事業として、年表編集を日本薬学会に代わって、当会が続けることになり、現在も意義ある事業として調

査、編集が慎重に続けられている。

1993（平成5）年9月に第53回 FIP年会在京王プラザホテルで開催され、柴田先生は正倉院薬物の近代化学分析法で世界に誇る国宝の真価を発表されて、スウェーデン薬史学会ヘルディリウス会長など海外からの参加者から絶賛を浴びた。

また、当学会40周年記念の継続事業として海外関連学会、施設などの研修訪問を実施した。1992（平成4）年の第1回訪問先は、柴田先生の留学先イギリスの薬学博物館（ロンドン）など、第2回は1993（平成5）年にドイツ、第3回は1994（平成6）年にスウェーデン、第4回は第32回国際薬史学会（パリ）参加、第5回リービヒ博物館、ハイデルベルグ薬事博物館、第6回は1996（平成8）年に北京、上海など中国4大医史博物館などを回った。これで本学会創立40周年の記念行事は終了したが、その後の行事として1999（平成11）年にローマ、フィレンツェ、ミラノなどの医薬関係施設の見学などを実施した。

また、薬史学文庫を東大薬学部図書館内に設け、ドイツメルク社寄贈の「ドイツ薬学史」および檉田義彦会員寄贈の「医心方」、「薬史学雑誌1号～最近号」などを整備し、その1部は東大薬学部図書館に移管済みである。

薬史学会創立40周年記念として、柴田先生が1962（昭和37）年に企画されて実現できなかった「日本製薬工業発達史・日本薬学会創立80周年の記念事業」を当学会で改めて取り上げて刊行した。これには国内34社98品目の開発記録を収載できた。柴田先生も32年ぶりに懸案を果し、関係者一同も喜んだ次第である。また、総会講演会の他に、毎年8月第1週土曜日に柴田フォーラム講演会を東京地区で開催している。

以上、柴田先生が会長を務められた12年間の主要な業績の一端を述べて柴田先生を偲ぶ言葉とした。事項の順不同および書き落としは、ご容赦ください。（柴田先生の写真は「薬学史事典」から掲示）

中村 健先生を偲んで

日本薬史学会常任理事 西川 隆

本学会評議員の中村健先生が2016年6月19日に亡くなりました。享年84でした。謹んで哀悼の意を表します。

先生は、1958年日本大学工学部薬学科卒業後、厚生省に入省。1964～1970年の薬務局製薬課在籍時は、「医薬品の製造承認等に関する基本方針」の策定に関わり、1972～1977年の保険局医療課時代は、分業問題が大転換する「分業元年」（1974年）前後6年間にあたり、担当技官として奮闘されました。

この医療課時代、調剤報酬などの改定に際して必要な薬剤師・薬局の業務実態の裏付け資料となる学術的研究が欠如していることを痛感、退官後の1982～2001年の間、日本大学薬学部助教授、教授として医薬分業の学術的研究基盤の確立に努められました。取り組んだテーマは「医薬分業の歴史の変遷を中心とした文献学的研究」をはじめ「調剤業務内容の計量的解明」や「薬剤師職能解明」「薬局の経



中村 健先生

営関連指標の研究」「調剤業務の国際比較」「薬局薬剤師の質の向上」——など幅広いものでした。かつその成果は学術的基礎データとして行政施策や日本薬剤師会の分業推進策に大きな影響を与えたことから、医薬分業の歴史的側面を視野に置いた実証的研究の草分け的存在として多大な貢献をされました。

本学会会員および評議員としての先生は、薬史学

の重要課題である医薬分業や薬事制度などを専門分野とする数々の貴重な論文を「薬史学雑誌」に投稿され、また、晩年に至っても薬史学への学問的な情熱は少しも衰えず、専門分野の論文に関する「査読者」として懇切な指導を実施して戴きました。編集委員長の筆者も頭の下がる思いでした。

このように、先生の歩みは厚生省時代の経験と教職および本学会評議員の研究者時代の業績が見事に融和され、数多くの著書を世に問いました。そして、その集大成ともいえる『医薬分業の歴史 証言で綴

る日本の医薬分業史』(2012)を企画、編集、分担執筆され、上市されました。本書は100年を超える医薬分業問題の歴史的経緯について見事にまとめられ、高い評価を受けました。さらに本学会編集の『薬学史事典』(2016)では「薬事制度の歴史」および「医薬分業の歴史」と題する2つの総論を執筆されました。これが最後の薬史学論文となりましたが、末永く貴重な論文として読み継がれるものと思います。

ここに先生のご遺徳を偲び、衷心よりご冥福をお祈り申し上げます。合掌。

中部支部だより

中部支部例会講演会の開催予定と演題募集

中部支部長 河村典久

1 中部支部例会開催のご案内

・開催予定場所の変更

中部支部例会はこれまで名城大学名駅サテライトを利用させていただいておりましたが、諸般の事情により閉鎖されましたので、次回からの支部例会を下記のとおり『金城学院サテライト・栄』にて行うこととしております。会員の皆様には急な変更でご迷惑をおかけいたしますが、会場は名古屋栄の中心部にありますので、よろしく申し上げます。

・開催予定日時：2017年2月18日(土)午後2時を予定しております。

〒460-0003 名古屋市中区錦三丁目15番15号
CTV錦ビル4階
(セントラルパーク地下街10A出口前)

2 演題募集

例会での演題をお待ちしております。講演ご希望の会員の先生は平成28年11月30日までに、中部支部事務局までお知らせください。演題、開催日時の詳細については薬史学会ホームページ(<http://yakushi.umin.jp/>)でお知らせする予定です。

発表演題申し込み締め切り：2016年11月30日

・中部支部事務局

中部支部事務局長 飯田耕太郎 名城大学薬学部
薬学教育開発センター 教育開発部門
〒468-8503 名古屋市天白区八事山150
TEL：052-839-2710 (直通) FAX：052-834-8090
E-mail：iida @meijo-u.ac.jp



薬史往来 先駆者、十二代田邊五兵衛

法政大学大学院 安士 昌一郎

明治及び大正時代は、企業家史の観点から薬業界の歴史を研究する上で大変興味深い。明治政府が医療制度の基盤に西洋医療を採用し、それに用いられる洋薬の普及および製造が勧奨された、言うなれば今日の製薬企業の土台が築かれた時期だからである。

当時の政府の動きに対し、一部の薬種問屋が迅速に反応した。田邊五兵衛商店はその1つである。『薬学史事典』にも記載されている通り、同商店は1678年に創業し、六代の折に道修町へ移住して朝廷の禁裏御用も勤めた長い伝統を有する。しかし明治期に入り、これまで通りの和漢薬取引を継続するか、主力商品を洋薬に切り替えるかという岐路に立たされた。この時店主だった十二代田邊五兵衛（以下、十二代五兵衛）は極めて潔癖な性格で、和漢薬取引の合理性に強い疑問を抱いていた。加えて、洋薬需要の拡大を早期に察知していた。彼は外国商館アーレンス商会との知遇を得て、洋薬商としての業礎を固めた。

十二代五兵衛は、製薬事業にも情熱をもって取り組んだ。彼は大日本製薬会社設立の6年前

である1877年に道修町初の製薬場を建設した。この製薬場はエーテル製造中の爆発事故によって焼失し、洋薬の製造法を身につけていた弟元三郎の命まで奪ったが、十二代五兵衛は製薬を諦めなかった。製薬場を再建し、2度目の火災でそれが失われると、1885年に店舗から独立した同心町製薬工場を完成させたのである。

また、十二代五兵衛は武田長兵衛商店、塩野義三郎商店と共同でヨード製剤の国産会社を設立したほか、ヘルスケア食品としての乳製品に着目して牧牛会社も営んでいる。『大阪製薬業史』の第2巻に収録されている1913年の製薬場訪問記では、田邊五兵衛商店を「浪花製薬事業界の巨頭」、十二代五兵衛を「道修町薬種商界の巨星」と称しており、道修町における彼の存在感の大きさが窺える。

長い伝統を持つ薬種問屋の店主であったにも関わらず、十二代五兵衛は潔癖さと先見性、そして並々ならぬ意欲によって数々の革新的な行動を成し遂げた。そして彼の企業家活動が、現在の田辺三菱製薬へと繋がっているのである。

編集委員会からのお知らせとお願い

編集委員会では、常任理事会の決定および理事・評議会の承認により経費削減のため、第75号の「薬史レター」からEメール配信に原則切替えました。日本薬史学会ホームページ上に新刊薬史レターが開けるアドレスを記載しておきますのでクリックするとご覧になれます。また、発行回数は年4回を2回とし、1号のページ数は原則8ページ以内で発行しています。これで経費は大幅な削減が見込まれます。ご意見をお聞かせ下さい。

日本薬史学会編集委員会

編集委員長：西川 隆

編集委員：荒木 二夫 小清水敏昌 砂金 信義 ヨング・ジュリア

薬史レター 第76号 2016年9月

編集人：西川 隆 発行人：折原 裕

日本薬史学会 The Japanese Society for History of Pharmacy (JSHP)

〒113-0032 東京都文京区弥生2-4-16 (助学会誌刊行センター内) 日本薬史学会事務局

tel : 03-3817-5821 fax : 03-3817-5830 e-mail : yaku-shi@capj.or.jp <http://yakushi.umin.jp>